

# 範疇文法による日本語の敬語表現の分析

Analysis of Japanese honorification in CG

渡辺 成美 \*<sup>1</sup> 戸次 大介 \*<sup>1\*2\*3</sup>  
Narumi Watanabe Daisuke Bekki

\*<sup>1</sup> お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科  
Ochanomizu University, Graduate School of Humanities and Sciences\*<sup>1</sup>

\*<sup>2</sup> 国立情報学研究所  
National Institute of Informatics \*<sup>2</sup>

\*<sup>3</sup> 独立行政法人科学技術振興機構 CREST  
CREST, Japan Science and Technology Agency \*<sup>3\*4</sup>

This paper extends in Bekki (2010), and presents the CCG framework of Japanese syntactic features and lexicon for honorifics. We also attempt to establish compositional semantics for.

## 1. 背景

### 1.1 敬語

日本語の各敬語表現には、どのような状況下で使えるかという使用条件がある。そしてこれらは戸次 (2008) [1] のように意味論的前提 (presupposition) もしくは慣習的含み (conventional implicature) として定式化し得ると考えられる。日本語文法の記述体系として、戸次 (2010) [2] は組み合わせ範疇文法 (Combinatory Categorical Grammar、以下 CCG) と動的意味論による分析を与えた。本稿では、その拡張として日本語の敬語表現のための統語素性と語彙項目を提案する。戸次 (2008)[1] では敬語を含む待遇表現の意味表示を与えているが、「お」「ご」等の接頭語、「になる」「する」のような活用語尾の分解までは示されていない。本論文では、その課題を解決するとともに、主な敬語表現に統語範疇を割り当て、意味論についての考察も行う。

なお、敬語を分析するにあたり、文化審議会 (2007) [3] に基づき敬語を表 1 のように分類する \*<sup>1</sup>。

### 1.2 CCG

本研究では文法記述の枠組みとして CCG を用いる (Steedman [4]、戸次 [2])。CCG は語彙化文法であり、組み合わせ規則と語彙項目からなる。規則のうち主要なものを抜粋したものが図 1 である。また \$ 記法と呼ばれる略記法を用いる。\$ は \$X\$、\$X/Y\$、\$X/Y/Z\$、...、\$X \backslash\$ は \$X \backslash Y\$、\$X \backslash Y \backslash Z\$、... といった統語範疇を一般化して表したものである。

### 1.3 DTS

本研究では、意味表示の枠組みとして、自然言語の証明論的意味論の一つである依存型意味論 (Dependent Type Semantics, DTS) (Bekki [5]) を用いる。また、‘ $\alpha$  オペレータ’ と呼ばれる、意味論的前提を表すことのできる仕組みを用いることにより、その敬語表現が高める/低める対象を表すこととする。

分類	上位	下位	例
尊敬語	カ格名詞句	話者	お帰りになる、仰る
謙譲語	二・ヲ格名詞句	カ格名詞句、話者	お待ちする、申し上げる
丁寧語	聞き手	話者、カ格名詞句	いたす、申す
丁寧語 美化語	聞き手	話者	です、ます お菓子、ご飯

表 1: 敬語の分類

(順・逆関数適用規則)	$\frac{X/Y \quad Y : a}{X : fa} >$	$\frac{Y : a \quad X \backslash Y : f}{X : fa} <$
((順・逆)関数合成規則)	$\frac{X/Y : f \quad Y/Z : g}{X/Z : \lambda x.f(gx)} >_B$	$\frac{Y \backslash Z : g \quad X \backslash Y : f}{X \backslash Z : \lambda x.f(gx)} <_B$
(等位接続規則)	$\frac{X : f_1 \dots \text{CONJ} : \circ \quad X : f_m}{X : \lambda \bar{x}.(f_1 \bar{x}) \circ \dots \circ (f_m \bar{x})} <_{\Phi} \quad \text{ただし } 1 < m$	

図 1: CCG の規則

## 2. 敬語の統語的分析

### 2.1 動詞につく「お」「ご」

敬語全体に関わるものとして、まず「お」「ご」の語彙項目を与える。

- (1) a. 先生をお待ちする (お+和語連用形)
- b. 先生をお待たせする (お+和語動詞使役接続形)
- c. 先生が学生にお慕われになる (お+和語動詞受動接続形)
- d. 先生にご連絡する (ご+漢語動詞語幹)

このように、動詞に「お」「ご」がつけられる場合として「お+和語連用形」「お+和語動詞使役接続形」「お+和語動詞受動接続形」「ご+漢語動詞語幹」の形が考えられる。ただし、使役接続形と受動接続形は、その後ろに空範疇が付随することにより、一段活用連用形となる。よって「お+和語連用形」と「ご+漢語動詞語幹」の二つにまとめることができる。これらを敬語語幹と呼び、\$S\$ の活用形素性値として新たに hon を加える。すると語彙項目は以下のように与えられる。

連絡先: watanabe.narumi@is.ocha.ac.jp, bekki@is.ocha.ac.jp

\*<sup>1</sup> 「謙譲語」「丁寧語」はそれぞれ「謙譲語 A」「謙譲語 B」と呼ばれることもある



(14) 「です」「ます」  
 ます  $\vdash S \begin{matrix} \boxed{1} \\ \text{term} \end{matrix} \begin{matrix} | \\ \text{attr} \end{matrix} \backslash S_{v::\boxed{1}} \begin{matrix} | \\ \text{cont} \end{matrix} : (\lambda P)(\lambda c)Pc \wedge \alpha_{up(hrr)} \wedge \downarrow_{down(sp)}$   
 です  $\vdash S \begin{matrix} \boxed{1} \\ \text{term} \end{matrix} \begin{matrix} | \\ \text{attr} \end{matrix} \backslash S_{n::da::\boxed{1}} \begin{matrix} | \\ \text{stem} \end{matrix} : (\lambda P)(\lambda c)Pc \wedge \alpha_{up(hrr)} \wedge \downarrow_{down(sp)}$

「- ございます」の種類として、本動詞「ガ格+ございます」、補助動詞「テ形+ございます」、形容詞文語残存連用形\*5 + ございます」が挙げられる。

(15) 「- ございます」  
 ございます  $\vdash S \begin{matrix} v \\ \text{term} \end{matrix} \begin{matrix} | \\ \text{attr} \end{matrix} \backslash NP_{ga} \begin{matrix} | \\ \text{+p} \end{matrix} : (\lambda P)(\lambda c)Pc \wedge \alpha_{up(hrr)} \wedge \downarrow_{down(sp)}$   
 ございます  $\vdash S \begin{matrix} v \\ \text{term} \end{matrix} \begin{matrix} | \\ \text{attr} \end{matrix} \backslash S_{te} \begin{matrix} | \\ \text{+p} \end{matrix} : (\lambda P)(\lambda c)Pc \wedge \alpha_{up(hrr)} \wedge \downarrow_{down(sp)}$   
 ございます  $\vdash S \begin{matrix} v \\ \text{term} \end{matrix} \begin{matrix} | \\ \text{attr} \end{matrix} \backslash S_{a::\boxed{1}} \begin{matrix} | \\ \text{cont} \end{matrix} \begin{matrix} | \\ \text{+l} \end{matrix} : (\lambda P)(\lambda c)Pc \wedge \alpha_{up(hrr)} \wedge \downarrow_{down(sp)}$

### 3. 制限のある敬語表現

以上、主な敬語表現について語彙項目を割り当てたが、これらのみでは説明できない現象が存在する。以下のような動詞には敬語化にあたり制限がある。(a) 語幹が一音節の動詞、(b) 外来語・擬態語・擬音語、(c) 悪い意味を持つ動詞、(d) 特定の言い換えがある動詞、(e) その他慣習的に一部の尊敬語・謙譲語の形にできない動詞、などである。

- (16) a.\*先生がお来になる。  
 b.\*先生がおスケッチになる。  
 c.\*先生がご失敗になる。  
 d.\*先生が本をくれられる。  
 e.\*先生がご水泳になる。

(16a) は、「来る」の語幹が一音節であるために「お/ご-になる」などの形にならないという例である。「来る」を尊敬語にすると「いらっしゃる」または「来なさる」「来られる」の形で用いられる。(16b) は外来語、(16c) は悪い意味を持つ語の例である。(16d) の容認可能性が低いのは、「くれる」に「くださる」という特定の言い換えがあるためである。(16e) に挙げられている「水泳する」という単語は以上のいずれにも当てはまらないが、慣例的に「お/ご-になる」などの形にならない。

またこの他にも、「お越しになる」「ご覧になる」のように慣習的に「お/ご-になる」の形で使われる語があり、これらにも敬語化の際の制限がある。表2は、以上のような動詞の各敬語表現についてまとめたものである。

表2に見られるように、敬語化に制限のある動詞には、(i) 「お/ご-」の形にはならないが「-れる」などの敬語にはできるもの、(ii) 敬語化自体できないもの、(iii) 「お越し」など、はじめから「お-」の形となっているためにそれ以外の形にできないもの、の三種類があると考えられる。(i) のような動詞は

\*5 「美しくございます」など。  
 \*6 命令の意味で「おくれ」は使われる。

その辞書の中で+O/+Gの素性値がつかないことにすれば良い。(ii)は意味論の中の待遇の問題だと考えられる。(iii)のような単語には、二通りの扱いが考えられる。(a)「お越し」を辞書の中であらかじめ尊敬語幹とする。(b)「お越し」を辞書の中であらかじめ敬語語幹とする。

(17) 「お越し」  
 a. お越し  $\vdash S_{n::da} \begin{matrix} | \\ \text{no} \end{matrix} \backslash NP_{ga} \backslash NP_{ni} \begin{matrix} | \\ \text{stem} \end{matrix} \begin{matrix} | \\ \text{+hn} \end{matrix} : (\lambda y)(\lambda x)(\lambda c)okoshi(x, y) \wedge \alpha_{up(x)} \wedge \downarrow_{down(sp)}$   
 b. お越し  $\vdash S_{hon} \backslash NP_{ga} \backslash NP_{ni} : (\lambda y)(\lambda x)(\lambda c)okoshi(x, y) \wedge \alpha_{up(x)} \wedge \downarrow_{down(sp)}$

この二つのどちらにも問題がある。(18a)では、「お越しなさる」を導出することができない。「-なさる」は敬語語幹をとらないからである。「お越し」とは別に「お越しなさ」を辞書に入れることで解決できるが、本質的でない。反対に、(17b)では「\*お越しする」が過剰生成される。この場合、意味論の中で処理されるものと考えられる。

## 4. 意味論についての考察

### 4.1 謙譲語の意味論

尊敬語、丁寧語、丁寧語は(話者・聞き手の正体が判断可能かどうかに関わらず)上位・下位に置かれているものが一意に決まる。一方謙譲語は、上位とされるものが語によって異なる(菊池(1997)[6])。

- (18) 謙譲語の高める対象  
 a.  $S \backslash NP_{ga} \backslash NP_o$  でヲ格を高めるもの  
 例) 待つ: 先生をお待ちする。  
 b.  $S \backslash NP_{ga} \backslash NP_{ni}$  で二格を高めるもの  
 例) 会う: 先生にお会いする。  
 c.  $S \backslash NP_{ga} \backslash NP_{ni} \backslash NP_o$  で二格を高めるもの  
 例) 返す: 先生に本をお返しする。  
 d.  $S \backslash NP_{ga} \backslash NP_{ni} \backslash NP_o$  でヲ格を高めるもの  
 例) 誘う: 演奏会に先生をお誘いする。  
 e. 「-から」を高めるもの  
 例) 預かる: 先生からごみをお預かりする。  
 f. 「-のために」を高めるもの  
 例) 作る: 先生のために料理をお作りする。  
 g. 「-と」を高めるもの  
 例) 別れる: 先生とお別れする。  
 h. 「-について」  
 例) 聞く: 先生についてお聞きする。

さらに語に複数の意味がある場合、その違いにも依存することがある。

- (19) a. 私がホールに山田先生をお送りする。  
 b. 私が山田先生にお歳暮をお送りする。

ここで「送る」という動詞が、(19a)では送迎、(19b)では贈呈の意で使われている。(19ab)共に高められているのは「山田先生」であるが、(19a)ではヲ格であり、(19b)では二格である。

(18)(19)に見られるように、謙譲語において動詞が二格を取りながら二格を高めないのは、二格が非人格的な物をとる場合であるように見える。更にヲ格も高めないものは、ヲ格も非人格的な物をとる動詞であるように見える。よって、ヲ格・二格には、必須格/非必須格以上のより詳細な分類が必要なのだ

終止形	言い換え	お/ご-になる	お/ご-だ	お/ご-なさる	お/ご-する	-なさる	-れる
見る	ご覧になる	-	-	-	-	見なさる	?見られる
来る	いらっしゃる、など	-	-	-	-	来なさる	来られる
スケッチする	-	-	-	-	-	スケッチなさる	スケッチされる
はらはらす	-	-	-	-	-	はらはらなさる	はらはらされる
失敗する	-	-	-	-	-	失敗なさる	失敗される
盗む	-	-	-	-	-	-	-
くれる	くださる	-*6	-	-	-	-	-
水泳する	-	-	-	-	-	水泳なさる	水泳される
お越しになる	-	お越しになる	お越しだ	お越しなさる	-	-	-
ご覧になる	-	ご覧になる	ご覧だ	ご覧なさる	-	-	-

表 2: 動詞と尊敬語表現の関係

分類	例
尊敬語	ご住所、お忙しい、お綺麗だ
謙譲語	ご案内、お恥ずかしい
丁寧語	お暑い、お寒い
美化語	お茶、お菓子

表 3: 敬語の分類

と考えられる。これについては、謙譲語の計算にあたりどこまで詳細に分類する必要があるのかも含め、今後の課題とする。

#### 4.2 名詞・形容詞・形容動詞

表 3 に示すように、名詞・形容詞・形容動詞に「お」「ご」が接続されるとき、その敬語の種類は語により異なる。また「お返し」「お鏡」のように「お」「ご」がつくと意味の変わる単語も存在する。そのため、単語が敬語化された時のその意味について表す仕組みが必要となる。

#### 4.3 敬意の対象の表現

上記では、敬意の対象を表すために、意味論の中で  $up(\phi) \wedge down(\psi)$  のような記法を用いた。しかしこれ以外にも、McCready et al. [7] のように、 $hon(\phi, \psi)$  といった表記も考えられる。これは  $\phi$  が  $\psi$  に敬意を示していることを表す。ここでは両者の違いについて検討する。

敬語表現が対象を「上位」と「下位」に分けるものだとすれば、 $up(\phi) \wedge down(\psi)$  の表現は適切であると言える。 $hon(\phi, \psi)$  は、高める/低める対象が複数となる場合、その組み合わせを全て示す必要がある。しかし一方で、相対的な関係を表すには、 $hon(\phi, \psi)$  のような表記が必要となると考えられる。

例えば、尊敬語と謙譲語を同時に使う二方面敬語には、 $hon(\phi, \psi)$  の表記の方がより向いている可能性がある。

(20) 部長が社長をご案内してくださった。

(20) のとき、社長 > 部長 > 話者という構図が成り立つ。 $\alpha$  オペレータ中での表記について、より広い可能性について考慮した上で検討することが今後の課題である。

### 5. まとめと今後の課題

本稿では、主な敬語表現について、一部の特殊な例も含めて統語範疇を割り当て整理をした。また意味論に敬語の使用条件を加味するにあたり、格助詞の細分化の必要性があるという仮説をたてた。また敬語表現の待遇条件を  $\alpha$  オペレータを用いて表したが、二方面敬語や二重敬語などを表すためには、意味

論の更なる分析が必要である。

### 参考文献

- [1] 戸次大介, 川添愛, 片岡喜代子, 齊藤学:「敬語の意味論」, 言語処理学会第 14 回年次大会発表論文集, pp.681-684, 東京大学 (2008).
- [2] 戸次大介:「日本語文法の形式理論」, くるしお出版 (2010).
- [3] 文化審議会: 敬語の指針 (答申), ([http://www.bunka.go.jp/kokugo\\_nihongo/bunkasingi/pdf/keigo.tousin.pdf](http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/bunkasingi/pdf/keigo.tousin.pdf))
- [4] Steedman, M.J.: Surface Structure and Interpretation, The MIT Press (1996).
- [5] Bekki, Daisuke.: (to appear). Dependent Type Semantics: An Introduction, the 2012 edition of the LIRa yearbook: a selection of papers, University of Amsterdam, 2012.
- [6] 菊地康人:「敬語」, 光文社学術文庫 (1997).
- [7] McCready, E., E. Hirasaki, K. Ichida, K. Kudo, and K. Kusumoto: Honorific Composition, a talk at the 14th Texas Linguistic Society conference (2013).